

Alternative Systems Study Bulletin

第12巻第4号

(2004年10月20日)

ネグリ『マルクスを越えるマルクス』の研究

第1部 ネグリ宛書簡

第2部 ネグリの『要綱』研究について

時間について考える(二)

時間とケア(時間論ノート)

現場から

政治・文化講座第3回レジュメ

後記

編集 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>

メール kyw04500@nifty.ne.jp

会費 正会員 : 年間 1口 10万円

賛助会員 : 年間 1口 3万円

購読会員 : 年間 1口 1万円

振込先 口座名 : 資本論研究会

(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

ネグリ『マルクスを超えるマルクス』の研究

第1部 ネグリ宛書簡

親愛なるネグリ

私はあなたが名付けたマルチチュードの一人に当たる。あなたが著書『帝国』で成功したことを率直に喜んでいる。『帝国』も『マルクスを超えるマルクス』も、本屋で見つけたときにはすぐには手が出なかった。厚すぎるし、また『帝国』については方法上の違和感があって、すぐ読む気にはなれなかった。

○ ところがある研究会であなたの著書を取りあげることになり、とりあえず『(帝国)をめぐる五つの講義』(青土社)を読んでみた。そこでわかったことは、当たり前のことだが、あなたには、ネグリ思想とも言うべき、独自の思想体系がある、ということだった。そこでネグリ思想の体系を知りたくて、半ば仕方なく、大著『マルクスを超えるマルクス』(作品社)を一読してみた。

マルクスの『経済学批判要綱』は、日本でも訳書が1960年代はじめには出版されているが、その内容に注目した研究論文が出はじめたのは、60年代末から70年代初頭だったと思う。実は私も、70年代初頭には『要綱』の研究に手をつけていて、あなたがエコールノルマルで講義をはじめた年には『資本論の復権』(鹿岩社 1987年)として出版している。

さて、今回あなたに手紙を書きたいと思ったのは、マルチチュードのイデオログになっているあなたに、一寸聞いてほしいことがあるからだ。それは、『要綱』研究の方法的視角にはじまり、マルチチュードの運動論の一つの柱となっている協同性についての提案で終る。とにかく手短かに話を始めよう。

○ 『要綱』研究のもう一つの視角

『要綱』研究の方法的視角について、あなたは『資本論』と切離し、『資本論』のマルクスに『要綱』を対置し、後者にマルクスを超えるマルクスを発見しようとしている。これはこれで一つの視角として成立しうるだろう。しかし、私が1978年に出版した著書で採用した方法視角は次のようなものだった。それは『要綱』のマルクスによって『資本論』のマルクスを再審し、単なる学者による学問の対象とされている『資本論』を、革命的実践の指針を獲得しうる理論書として復権することだった。

当時の日本では、宇野弘蔵が『資本論』を何人でも承認せざるを得ない経済学の原理論へと抽象化する方法を提案し、これがもてはやされ、学問と実践とを切り離す思考が大勢を占めていた。『資本論』の理論の切りつめに関しては、労働価値説の否定にはじまり、資本・賃労働関係の平等化がはかられ、とりわけ階級の差異を、商品所有者という見地から同等化(労働者を労働力商品の所有者であるとみなすこと)する試みがなされた。

だが、『要綱』のマルクスで、『資本論』を再審することで、宇野のような『資本論』解釈が成立しないことが明らかとなる。私は『要綱』で展開されている資本と労働の交換の「二つの過程」論に依拠して、資本・賃労働関係における階級支配の基礎を働く者の経済的服従に見る、という、綱領的視点を復活させた。この視点は、第一インターナショナル一般規約のなかに、マルクスによって盛り込まれているが、その後忘れ去られてしまったものだ。

念のため、引用しておこう。「労働手段すなわち生活源泉の領有者にたいする労働者の経済的な服従が、あらゆる形態の隷従、あらゆる社会的悲惨、精神的退廃および政治的従属の基底に横たわること、したがって、労働者階級の経済的解放が偉大な最終目標であり、すべての政治運動は手段としてこの最終目的に従うべきであること。」(第一インターナショナル一般規約前文より)

次に私は、『要綱』での対象化された労働と生きた労働の区別に注目した。通常労働価値説というところ、この両者を区別せず、労働それ自体が価値の実体であると解釈されていて、この見地からは労働者の生きた労働にも価値の実体を見ることになる。そして、マルクスが価値の実体として、抽象的人間労働という規定を与えたとき、生きた労働にもこの規定を及ぼそうとしてきた。たしかに生きた労働も時間で計られるものだから、生理学的意味での抽象的人間労働としての属性をもっている。しかし、価値規定の場合は、商品で表示されている労働、つまりは対象化されている労働が、自己を他の諸生産物(商品)との関係において自身を抽象化し、抽象的人間労働という社会的な基準で自身を他に同等化していることが問題で、この理解なしの価値概念は、古典経済学の価値概念への後退を意味している。『要綱』のマルクスで『資本論』の商品論、価値論を再審することにより、労働生産物が商品形態をとることの歴史的制約性ということの理解への道筋が開けてきた。

三番目に、『資本論』の蓄積論では、資本制的取得法則が、「所有と労働の分離」と明記されているが、これも忘れられた視点であった。対象化された労働力と生きた労働との区別と、それにもとづく資本と労働との交換を二つの過程とみる『要綱』の見地は、直接的生産過程における資本制的取得法則が、所有と労働との分離であることを再認識させることになった。ここから、資本と賃労働の関係は、労働力商品の所有者と資本家との自由な交換関係と捉える立場は論外として、単なる搾取関係として見るだけでなく、(1)労働に対する資本の指揮、(2)強制労働、(3)生産手段への労働者の従属、と把握することが出来、労働者は、資本のために剰余を生産する限りで働くことを許される、という規定の理論的解明に到達したのだった。

ソ連「社会主義」の敗北の必然性

『資本論の復権』では『要綱』のこの三点に注目したが、その後、価値論、貨幣論、利子生み資本論について考察した『価値形態・物象化・物本性』(資本論研究会 1990年)では、商品からの貨幣の生成についての『資本論』の理論を『資本論初版』の商品論から再審し、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為にもとづくものであることを示した。商品所有者たちは、自らの商品を市場で価格をつけて売り出すときに、そうと意識せずに貨幣商品金で自らの商品の価値を表示し、そうすることで商品金に貨幣としての社会的力を与えているのだ。だから貨幣は不滅のように見えるが、日々の売買によって都度生成されており、誰もが商品を市場に出さなくなったとたんに、消滅してしまう存在なのだ。このことが判明すると、ソ連社会主義の

試みが何故失敗したかを原理的なところで説明できる。ソ連共産党は、政治権力を奪取し、プロレタリアートの独裁によって、商品、貨幣、資本を廃絶しようとした。しかし、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの本能的共同行為によるものだとしたら、本能的行為を政治的な意思の力で廃絶しようとするには背理が含まれていたのだ。

その次に、この商品からの貨幣の生成が解明しえたことで、物象化が、物象による人格の意志支配であることが判明してきたことだ。物象化について、マルクス自身は「人格の物象化、物象の人格化」と述べ、このメカニズムについては自明のものとして、とりたてて説明はしていなかった。しかし、交換過程において、自らの商品で他の商品を買おうと試みて結局『資本論』初版の価値形態の第4形態を実現し、交換の不可能性に直面した商品所有者が、商品がお互いに全面的に交換可能な形態は、第3形態であるとする商品の本性に従い、商品に自分の意志を宿すことで「考える前に実践し」商品金で自らの商品の価値を表現することで、交換過程を成立させ、貨幣を生成させていく。ここに物象化の原理があり、それは、商品(物象)による人格の意志支配なのだ。

第三に、この物象化の原理が明らかとなると、物象的存在関係にもとづく人格的独立としてある今日の人間がもつ自由という観念の限界も見えてくる。人間にとって、他の人格による意志支配は、支配・服従関係として意識されるが、単なる自然物としてしか見えない物象に意志支配されても、自然法則に順応し、これを利用するのと同様に、支配・服従関係とは考えない。つまり、今日の人間の自由の内実とは、物象による意志支配の枠内で成立しているものなのだ。

マルチチュード、それは迂回路をつくっている。

『要綱』による『資本論』の再審によって得られた理論的武器にもとづいて、政治論を組み立ててみよう。

まずソ連崩壊の根本原因を明らかにし、革命のオルタナティブを提出できる。商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によるとすれば、まず政治的権力を奪取し、プロレタリアートの独裁によって社会変革(商品、貨幣、資本の廃絶)をなしとげようという試みが成功しなかったのは必然的な事態だった。本能的な行為は、意志の力の彼岸にある。とすれば、革命のオルタナティブは、本能的共同行為をしなくても、社会の資源配分が可能な迂回路を形成していくことだ、ということになる。

こうして、社会変革とは、権力奪取と、それ以降の未来の問題ではなく、「いま、ここ」での運動として組み立てなければならないものとなる。

とすれば、あなたのマルチチュードは、一挙的な、神業による社会変革や、モデル的運動が次から次へと伝播して、権力奪取にいたる、といったものではなく、日々、資本を形成するような労働を拒否し、剰余価値を生産しないで生活する、ということを実行する存在だ、ということになりはしないだろうか。あなたが強調する非物質的労働(知的・協業的労働)の意義は、貨幣生成の本能的共同行為を無用とする関係を迂回して作り出しているところにあると、私には思われる。

ではお元気で。今後の活躍に期待しています。

第2部 ネグリの『要綱』研究について

経済学的範疇を政治学的範疇として読む試み

1) 『要綱』の読み方

周知のように、ネグリは『資本論』のマルクスを客観主義的叙述と見なし、『経済学批判要綱』のなかに革命的なマルクスを見だし、そこに『資本論』のマルクスを超えるマルクスの像を描き出そうとした。「『資本論』は、批判を経済理論に還元し、主体を客体性の中に解消し、修正主義的で抑圧的な支配層であるインテリゲンチヤに転覆力をもつプロレタリアを従属させた」(ネグリ『マルクスを超えるマルクス』作品社、58頁)というわけだ。ではネグリはどのようにしてマルクスを超えようとしているのだろうか。

ネグリは第一講義で、自らの『要綱』の読み方について、次のように概括している。

「このように『要綱』を通じてわれわれは一つの運動に立ち会っているのである。その運動とは、理論を前方に送り出す運動である。その運動は我々の諸知覚を徐々に拘束していき、ついには集合としての労働者と集合としての資本家との敵対的関係という決定的な契機を把握させるに至るのである、この関係が恐慌[危機]として具体化される際の決定的な理論的通路は次の二つである。第一に、『要綱』第一分冊において、剰余価値という形態において価値法則が定義された(すなわち剰余価値法則の最初の完成された定式化)ことである。第二に、『要綱』第二分冊において、搾取論(剰余価値法則)が資本の流通・再生産メカニズムの内部に拡張されたことである。このことは、搾取法則を、恐慌[危機]の法則とコミニズムへの階級闘争の法則として再解釈することである。」(35-6頁)

ネグリは、このような見地から、マルクスが『要綱』で展開した搾取論(剰余価値論)と恐慌論に注目し、そこに、労働者の自己価値創造の可能性を読みとろうとしている。ネグリの視点は首尾一貫しているので、個々の読みへの論評はせず、ネグリの首尾一貫した視点とは何かについて解明していくことにしよう。

2) ネグリの視点

ネグリの視点について、自身が語っているところに注目してみよう。

「恐慌論を資本の理論として、剰余価値論を革命の理論として、構築するという問題」(125頁)

「その主題とは何か?それは普遍的物質性としての貨幣とそのことを隠蔽するイデオロギーである。すなわち、支配され制御されるアンチテーゼとしての貨幣、あるいは搾取を指令する政治的現実としての貨幣である。したがって、この分析領域は政治的なものだ。剰余価値論を基礎付けるためには、搾取が政治社会を組織しているということ、すなわち、搾取が社会の土台を構成しているということから出発しなければならない。マルクスは『資本としての貨幣』という主題と遭遇し、

その結果として生産過程の分析を始めることによって、指令を貨幣の物質性として認識したのである。」(132頁)

「貨幣から剰余価値へ、これこそが階級的武器を与える政治的行程なのである。」(133頁)

「剰余価値の敵対的関係を暴露することから、指令、媒介、政治の地平の破壊へと進む道である。」(134頁)

このように、ネグリは『要綱』で展開されているマルクスの理論の中心を、恐慌論と剰余価値論に求めている。そして、貨幣から剰余価値へと進むマルクスの叙述を、政治的行程と捉え、『要綱』の分析を政治的なものとして捉えている。

3) マルクスとネグリの対比

ネグリの視点の特色は、マルクスが展開している経済学的範疇を、政治学的範疇として読もうとしているところにある。この読みかえはどのようにしてなされているかについて具体的に見てみよう。

(マルクス)「しかしいまやこの出発点は、もはや単純な等価物ないし労働の単純な対象化として措定されるのではなく、自分自身を更新し、自分自身からふたたび流通を開始するためにのみ、労働に身をゆだね、労働の材料となるような、対象化され自立化した交換価値として措定されるのである。」(142頁)

(ネグリ)「したがって、労働は、交換という形態、貨幣という形態をとる場合にのみ資本へと転化する。このことは、この[賃労働と資本の]関係が敵対的関係であることを意味している。つまり労働と資本は、生産的総括を形成するところの交換においてのみ、自律的で独立した実体として現われる。この敵対的関係によって、単純流通という外観は破壊される。」(143頁)

ネグリの解釈によれば、マルクスはここで、「交換においてのみ自律的で独立した実体として現われる」ということを述べているとされているが、マルクスが言っているのは、労働と資本が自律的で独立した実体として現われるといったことではない。資本と労働との交換において、(具体的には資本の生産過程)、資本の方が、労働に身をゆだね、労働の材料となるような、対象化され、自立化した交換価値、つまりは資本としての貨幣が労働用具と労働手段へと交換されることが必要だと述べているにすぎず、ネグリが解釈したように、この交換、つまりは資本の生産過程で、資本と労働とがそれぞれ自律的で独立した実体として現われる、といったことを述べているわけではない。

(マルクス)「労働者が資本に対して提供しなければならない使用価値、したがって彼が一般に他人のために提供しなければならない使用価値は、生産物のうちに物質化されてはおらず、およそ彼の外部に存在するものではなく、したがって現実存在しているものではなく、ただ可能性としてのみ、彼の能力としてのみ存在しているにすぎない。それは資本によって求められ、運動のなかにおかれてはじめて現実性となる・・・この使用価値は、資本から運動を受けとるようになるやいなや、労働者の一定の生産活動として存在する。それは、一定の目的にむけられた、それゆえにまた一定の形態で発現する労働者の生命力そのものである。」(144頁)

(ネグリ)「対立は二つの形態をとる。まずは使用価値と交換価値の対立であるが、労働者の唯一の使用価値が抽象的で無差別な単純能力だということを踏まえれば、この対立は対象化された労働

と主体的な労働の対立でもある。」(144頁)

マルクスによれば、資本と労働との交換において、資本の側は交換価値として生きた労働を買うが、労働の側は交換と引き換えに使用価値を提供する。普通の商品交換では買い手は貨幣と引換えに使用価値(商品)を獲得し、売り手は商品と引換えに貨幣を獲得するが、資本と労働の交換では、買い手(資本家)は貨幣と引換えに商品を獲得するのではなく労働力の処分権を獲得し、他方、売り手(労働者)は、貨幣と引き換えに、自らの労働力の使用価値を引渡すことになり、従って資本の生産のために労働しなければならない。ところが、この交換において、資本と労働とがそれぞれ自律的で独立した実体として現われると見たネグリは、この交換において対象化された労働と主体的労働との対立を見だし、それぞれの自律的性質に注目している。

(マルクス)「所有の労働からの分離は、資本と労働とのこの交換の必然的法則として現われる。非資本そのものとして措定された労働は次のようなものである。(一)対象化されていない労働、否定的に把握されたそれ(それ自体としてはやはり対象的であるが、客体的形態にあつては非対象的なものそれ自体なのである)。このようなものとしては、労働は、非原料、非労働用具、非原料生産物であり、あらゆる労働手段と労働対象から、つまり労働の全客体から切り離された労働である。それは、労働の實在的現実性のこれらの諸契機から抽象として存在する生きた労働(同様に非価値)であり、このような丸裸の存在、あらゆる客体性を欠いた純粋に主体的な労働の存在である。……

(二)対象化されていない労働、非価値、肯定的に把握されたそれ、すなわち自分自身にかかわってくる否定性、それは対象化されていない、したがって非対象的な、すなわち主体的な、労働そのものの存在である。それは、対象としての労働ではなく、活動としての労働であり、それ自体価値としての労働ではなく価値の生きた源泉としての労働である。それは、富が对象的に現実性として存在する資本に相対して、生産の中で自己をそのものとして確保する富の一般的可能性としての一般の富である。こうして労働が一方では対象としては絶対的貧困でありながら、他方では主体として、活動としては富の一般的可能性であることということは、いささかも自己矛盾することではない。」(146-7頁)

(ネグリ)「対立は主体を措定し、そしてこの労働の主体は一般的抽象として定義される。この抽象、すなわち抽象的な労働集合は主体的な潜勢力なのだ。この抽象的かつ一般的な潜勢力となることによって、労働は一般的な潜勢力、ラディカルな対立項として出現する。この一節においては、資本からの労働の分離がまさに労働を定義する特質となっている。『抽象性』という言葉のもつこの意味、すなわち『一般化されている』という意味と『分離されている』という意味は、この創造的な労働者主体の中で、言いかえれば、あらゆる潜勢的な富の源泉であるというその主体が有する能力の中で、再び結合し、再強化されるのである。」(147-8頁)

交換における資本と労働の自律的性質に注目したネグリは、所有と労働との分離を、資本からの労働の分離と受けとってしまっている。ネグリは分離の内容をこのように捉えることで、生産過程にある労働を「主体的な潜勢力」と考えてしまうのだが、マルクスが言っているのは、生きた労働は富の一般的可能性なのだが、しかし、この富の所有は労働から分離されてしまうのであり、従って、「潜勢力」といっても、決して顕在化しないものとしてあるということだ。ところで、マルクスが、ここで労働の使用価値と言っているのは、労働力の行使のことであり、価値の生きた源泉としての労働、ということなのだが、ネグリは労賃についてのマルクスの叙述とないまぜにして、「使用

価値は必要労働であり、必要労働は使用価値である」(148頁)と述べている。

(ネグリ)「資本家が労働者の使用価値を交換価値に変換するとき、二つの自律的な実体[交換価値と使用価値]が対立し強制的に結び付けられる。このとき、種差的な尺度となる一つの関係が成立する。それは、労働力——資本により取得され、一般的な資本関係に従属させられる——の再生産に必要な労働という尺度である。」(148頁)

ネグリが、労働者の使用価値が必要労働だというとき、それは労働者が得た賃金で買う生活手段のことだ。それは断じて、生産過程にある労働の使用価値ではない。またネグリは「資本家が労働者の使用価値を交換価値に変換する」と言っているが、それは一体何のことだろうか。資本家が労働者の使用価値としてある価値創造力を交換価値に変換するとは、賃金を払うことだ。そうではなく、資本家は自ら所有する交換価値を労働者の使用価値に変換することで生産過程を成立させるのだ。マルクスは資本と労働の交換が二つの過程から成ることを明らかにしている。一つは、労働の使用価値を交換価値に変換する過程であり、労働力の売買という普通の商品交換である。労働者はこの売買で得た貨幣で生活手段を買う。そしてこれが必要労働と呼ばれるものだ。もう一つの過程は、労働力の売買の帰結として、資本家の下で労働することだ。この場合、資本家の交換価値が、労働の使用価値に変換されるのであり、この使用価値が価値増殖をなしとげることで、資本は自らの交換価値を価値増殖させるのだ。生産過程に資本と労働という二つの自律的な実体を発見してしまったネグリには、資本と労働の交換の二つの過程の区別がつけられず、これを普通の商品交換に解消しているのではなかろうか。ここからしか「労働者の使用価値を交換価値に変換する」といった読み方は生まれない。

4) ネグリの資本主義批判の根本

資本と労働との交換に二つの過程を見ることなく、これを単なる商品交換と同じものとして読んでしまったネグリにとって、資本の生産過程とはどのようなものとなるのだろうか。

「主体の敵対的關係が極端に強調されることを通じて、価値法則は剰余価値法則という形態を取るようになる。ただし、労働過程が資本に包摂される時に初めて、剰余価値論は適切なタームで定義される。従って、剰余価値論は直ちに搾取の理論である。価値論においては放置されていたいかなる幻想も、剰余価値論のレベルでは生き残れない。労働の創造力は、もしそれが自由に振る舞えるのであれば、資本を規定する傾向をまったくもたない。言いかえれば、支配と圧制の政治的過程としての、あるいは社会に対する全面的指令としての搾取のみが、価値と剰余価値の両者を規定するのである。初期の敵対的關係のレベルは非常に強固であるから、搾取、強制、暴力のみがその関係をまとめることができる。」(154頁)

ネグリによれば、生産過程では資本から労働が分離され、双方とも自律的で独立した実体とされていた。では生産過程で労働は何故、搾取され、剰余価値を資本に取得させるのか。ネグリの答えは単純だ。それは資本による「支配と圧制の政治的過程」であり、あるいは「社会に対する全面的指令」によって搾取がなされるからだ、というのだ。つまりは上部構造(政治)が経済的な搾取を実現している、と見ているのであり、資本制的な搾取も、封建的な身分制による搾取と同じようなものとして捉えているのだ。

「資本は拡張する力として、生産および再生産として、そして常に指令として現われる。価値増殖は連続的かつ全体主義的過程であり、限界も休息も知らない。労働は価値増殖過程の中で支配されているので、その自律性はあらゆる場面で極限まで縮減され、非存在という限界まで追いつめられる。確かに、剰余価値論は価値増殖過程の各タームとダイナミクスを定義すると同時に、必要労働の空間（これは絶対的に相対的ではありえない）を、少なくとも賃金という神秘化された形態のもとで定義する。しかし、ここで強調されているのは、過程の統一性と、資本の主体的表われである。価値増殖過程においては、資本は指令という全体主義的な主体性を獲得するのである。」（158頁）

これまでネグリが『要綱』が貨幣論から始まっていることを高く評価し、それを「貨幣批判から権力批判へと入る理論的過程のための全体的なトーンの開示」（96頁）とみなし、「指令を貨幣の物質性」（132頁）と捉えて「貨幣から剰余価値へ、これこそが階級的武器を与える政治的行程なのである」（133頁）と述べていることの意味について計りかねていた。でも、ここに至って、ネグリの論旨が単純なものだったことが判明する。自律的で独立した実体であるはずの労働が何故価値増殖過程にしばりつけられているか、といえ、それは資本の指令という全体主義的な主体性によるものであり、そして、この資本の指令は実は貨幣の物質性にもとづくものとネグリが考えているからだ。だからネグリの搾取批判は「実際には、交換の外観の背後では、窃盗が行われているのである」（163頁）というレベルになっている。

5) 帝国論の背景

ネグリの帝国論には、帝国はマルチチュードがつくり出す、とか、帝国の非局在性（非場所性）といった、意表をつく考えが展開されている。このような考えは、実はマルクスを超えたネグリ思想の帰結であることを、この本によって示そう。まずネグリの階級闘争論は次のようなものだ。

「利潤率の傾向的低下法則は、結局、剰余価値論に照らして解釈される場合にのみ正しいのだ。労働者階級は資本闘争の労働に対抗して、また自らの自己価値創造を求めて闘争する。利潤率の傾向的低下法則の傾向的性質は、そのような労働者階級の闘争が生み出す錯綜した圧力を基礎に組織される。さらにいうと、これらの諸条件でのみ、労働者[階級]の観点からの『破局』は可能になる。コミュニズムは不可避だと考えないことによるのみ、コミュニズムは不可避になる。」（200頁）

ネグリの「剰余価値論」とは、自律的で独立な実体としてある労働が、資本の下ではその労働を窃盗され、剰余価値を資本に与えるように、全体主義的な資本の指令が働いている、というイメージだ。だから、労働者の闘争は、この資本の下での労働とは別の、自己価値創造を求める闘争として観念されている。これこそ、アウトノミア運動が求めたものだった。

ところでネグリの資本理解は、「資本の指令」といったレベルから、さらに進められる。マルクスが、資本の最高度の発展について「一方では資本が社会的生産のいっさいの条件を自らの支配下に収めた程度を示し、だからまた他方では、社会的な再生産的富が資本化されている程度を示す」（220頁）と述べていることに対応して、ネグリはこれを「跳躍の実体、資本における変化の条件でもある」（221頁）と評価し、「資本は社会を構成し、資本は完全に社会的資本となっている」（2

21頁）と述べている。

マルクスが資本の支配するものを、「社会的生産のいっさいの条件」として、決して社会そのものへの支配とは考えていないのだが、ネグリには、これが資本が社会を構成している、というように読み代えられる。そして、「社会的資本」とは、「理念的・集合的な資本家としての国家」（221頁）とみなされる。

ネグリにあっては、資本が組織するものは、企業ではなく社会であり、生産ではなくて指令という政治なのだ。だから、国家による市民社会の総括という見地はなく、資本が維持する市民社会が即国家として捉えられることになる。だから後に展開することになる「帝国」論は、国家の問題ではなく、資本の問題であり、政治的に捉えられた資本のことなのだ。

このような独自の資本の捉え方からすれば、階級闘争の役割についても新しいものがつけ加えられる。「資本を運動させるのは階級闘争だけである。」（242頁）ここにはマルチチュードが帝国をつくった、という帝国論における主張の母体がある。そして、階級闘争によって拡張することをせまられる資本は、世界市場の形成に、むかひ、「世界市場の主題は、資本制的発展の革命的傾向についての最も成熟した例示である」（232頁）とされるに至る。

6) 新しい主体の登場

ネグリはこれまでプロレタリアートの自律性と自己価値創造力を資本の発展の原動力として捉えてきたが、次には、これを主体としての資本に対するもう一方の主体として捉えかえす。資本が主体として登場したとすれば、それはそれに止まるわけではない。

「別の主体、労働者[階級という]主体が、現われなければならない。資本制的包摂は、労働者[階級]のアイデンティティを排除するのではなく、その活動を支配するにすぎないからである。社会的資本の集合的な力によって[生産と流通]過程が導かれてきたまさにそのレベルで、この労働者[階級という]主体が出現しなければならない。資本が一方の主体であるとすれば、労働が他方の主体でなければならない。

何よりもそれは、資本との関係によって変化する主体でなければならない。一連の包摂過程において、資本は階級構成を変化させ、それを資本の支配の下かつその内部で、より高次の統一体へと駆り立てる。」（236頁）

ネグリはこの資本との関係によって変化する主体の歴史的変遷過程について、次のようにまとめている。

「社会的資本の形成は、社会化された労働者階級の出現と並行して進む。まず、労働者は、資本が社会的に発展するレベルにおいて、資本によって統一される。しかし、ついで、労働者は、労働者自身によって、物質的形成とアイデンティティにおいて統一される。すなわち労働者は交換関係の破壊——これは労働者の協同存在の基礎となる——によって統一される。ここにあるのは、資本の集合的な力とその拡張に対抗する形態の爆発である。新しい主体が登場したのである。」（238-9頁）

ネグリによれば、資本によって統一される労働者とは、労働組合の段階にあり、そして、次の段階における労働者の統一体は「政治的統一体の物質的基礎」（237頁）とされる。これが新しい主

体であり、この段階では、労働者は交換関係を破壊して、労働者の協同存在の基礎をつくっていく、というのだ。この新しい主体についての解明は、賃金論でなされている。「労働者[階級]の主体性を獲得し、その役割を明らかにするためには、われわれは何よりもまず賃金形態を探求しなくてはならない」(242頁)とネグリは述べている。

賃金論でネグリが注目するのは、労働者にとっての必要労働が生活資料へと変換される「小流通」である。マルクスが小流通について、「資本のうちに賃金として措定された部分の流通は、生産過程に伴っており、これと並ぶ経済的形態連関として現われており、またこれと同時的であり、これと織りあわされている」と述べているところを引用して、ネグリは次のように述べている。

「これは、資本制的関係、交換、搾取はプロレタリア主体の独立性を廃棄するものではないことを意味する。それだけではない。流通形態の二重性から生まれる絡み合いの中でこそ、還元不可能な主体——すなわち何によっても慰撫されることのない主体——が出現する。この主体と結びついた諸価値が、資本制の過程に影響をおよぼす。」(252頁)

ネグリは小流通を、還元不可能な主体が生れる要因とみている。どうしてだろうか。先に見たように、ネグリは、使用価値を必要労働と捉えていた。この捉え方から、小流通に対する独自の見解を導き出す。

『使用価値の側面』について述べなくてはならない。使用価値は[資本と労働]関係の解消不能な性格を基礎づける。必要労働は生産物に関わり、その消費を通じて生産物を使用価値に転形する。必要労働だけが、資本制的価値増殖に対して自らの抵抗——すなわち、自分自身の維持、再生産という抵抗——を対立させる、こうした能力をもつ。抵抗は不動点によってなされるだけでなく、むしろそれ自体が一つの循環、一つの運動、一つの成長なのである。『賃金の支払いは、生産行為と同時に、またそれと並んで行われる。一つの流通行為なのだからである』この同時性と平行性は、労働者主体の独立を、すなわち資本制的価値増殖に対抗する労働者固有の自己価値創造を特徴づけている。」(253-4頁)

ネグリが何を考えているか、おわかりだろうか。必要労働と剰余労働との関係に注目して、まず、必要労働を増大させることが、剰余労働の侵食になると考えている。そして、必要労働は小流通をなしているが故に、資本の流通過程とは独自の領域にあり、この小流通は労働者主体の独立を保障し、かつ必要労働を増大させ、小流通を拡大していくことが、労働者固有の自己価値創造の特徴だというのだ。こうしたことを根拠にネグリは次のようにマルクス主義を超える。

「例えばマルクスにとって、自己価値創造の局面について下される?的判断は客体的であった。ところがわれわれにとって、すなわち労働者およびプロレタリア階級がすでに編成(と力)を獲得したレベルにおいては、その判断は完全に主体的なものに転化している。これはあらゆる関係が意志によって維持されていること、あらゆる規定が発展を基礎づけていること、挿話的なあらゆる出来事さえ傾向を示していることを意味する。さらに今や、革命的投企を階級のダイナミクスに基づく敵対的な力の構築として定義できるところまで、[プロレタリアの]自己価値創造の基礎は拡大された。」(256頁)

ここまでネグリの『要綱』解釈をたどってきて、私はハタとヒザをたたいた。ネグリにあっては、当初から、この新しい主体はアウトノミア運動であり、その思想的核は非労働と労働者の自己価値創造にあった。そして、この核心の証明を『要綱』のなかに見いだそうとし、そして、マルクス

が展開している経済学的カテゴリーを政治学的カテゴリーに読み換えることによって、その証明をなしとげてきたのだ。そして、そうすることで「マルクス主義」の革命論とは別の革命論を提起したのだ。

経済学的カテゴリーを無理に政治学的カテゴリーとして読むことによって生じてきている混乱に目をまどわされずに、別の革命論として、この新たな主体論を読むと、そこには継承すべき課題が多々含まれていることがわかる。いまからは、ネグリの新しい主体によるコミュニズム論の内容を豊富化していくことに専念しよう。

ネグリは先の引用部分で、マルクスの場合には、労働者の自己価値創造の局面についての歴史的判断は客体的であったが、今日では主体的なものとなり、意志によって維持されていると述べている。このネグリの思想を、旧来のマルクス主義の革命論の目から見れば、ネグリは意志を革命の原動力とみなしている、という批判となる。しかし、ネグリは権力奪取の以降に社会革命があるのではなく、「いまここで」労働者の自己価値創造が資本の支配を掘りくずしているのであり、その限りで変革の意志によって、この自己価値創造が維持されねばならないと言っているのだ。

7) コミュニズムと労働

ネグリは自らのコミュニズム論を一言で特徴づけている。

「移行がコミュニズムの形態において姿を現わすのではなく、コミュニズムが移行の形態をとるのである。」(282頁)

資本主義からコミュニズムの移行を想定し、その移行を目標に「マルクス主義」の運動があったが、ネグリは、これを否定し、コミュニズムが移行の形態をとる、と述べている。これはつまり、資本主義社会のなかにあつて、それを移行させる形態としてコミュニズムの運動を捉えることであり、社会変革は将来のことではなく、「いまここで」の運動としてあることを主張しているのだ。これはもともとネグリが考えていた思想だろうが、この考えを『要綱』解釈によってあとづけているので、このあとづけの概略をみておこう。

ネグリにあっては、資本は指令である。そして、生産過程では資本と労働とは分離され、双方が自律的で独立した実体となるとみなされる。そして小流通をなす必要労働が増大していくことが、即労働者の自己価値創造であり、「革命的プロレタリアがたどる道程においては、最領有された剰余労働が必要労働によって支配され」(273頁)「資本関係の否定としてのコミュニズム」(277頁)があらわれる。「ここで資本関係の否定とは資本の指令の転回ではなく、必要労働と剰余労働の関係の逆転のことであり、剰余労働の否定と再領有のことである。」(277頁)

つまりネグリは、「資本の指令の転回」=プロレタリアートの独裁ではなく、「いまここで」の労働者の自己価値創造にコミュニズムを見ているのだ。私はこのネグリによる「マルクス主義」の革命理論の批判が成功しているとは思えないし、私は別の形で批判を提起している。それはさておき、アウトノミア運動には労働者の自己価値創造の実践があつたが、この実践を反映しているのだろうかと思われるが、ネグリの労働論は非常に面白い。一寸詳しく見てみよう。

「対抗的主体の出現とは何を意味するのか?それは、コミュニズムが、発展の諸段階の狭間で誕

生ずる新しい集合的な個性の上のみ打ち立てられることを意味する。この新しい集合的な個性が、生産と発展の新しい原則を創出する。解放された主体は、新しく集合的に展開される諸要求からなる新しい世界を開くのである。」(293頁)

ここで念頭におかれているものは、恐らく、ラディカルな協同組合運動だろう。実際にネグリは、労働の協同的な性質について言及している。

「計画化は労働の協同的な性質の表現(および条件)なのである。ここで労働の協同的な性質とは、[資本の]指令のもつ疎遠な性質、および指令の物象化を排除するはずのものである。」(304頁)

ネグリは、労働者の自己価値創造は、労働放棄の計画化である、と述べている。

「労働の拒否——これは労働を放棄するための計画的な合理的な投企へと自らを拡張した——一から始まって、われわれは、主体が固有の自己形成の諸条件を措定していくのみをみてきた。しかしこの理論の流れは戦略的な要求によるものである。[実際には]『労働の拒否が主体を形成する』というときの『主体』とは、世界内に投影=投企していく主体、生産様式を形成していく主体なのである。マルクスもまたわれわれも、この主体について前もってイメージすることはできない。」(306頁)

資本家の工場に誰も働きに行かなければ(労働の拒否)資本は消滅する。しかし、労働者は、雇われて働かずに生活していける、「もう一つの働き方」を実現していなければ、「労働の拒否」は空疎である。つまり、ネグリは、「労働の拒否」で、「もう一つの働き方」による迂回作戦をここで主張している。この問題意識については私も共有しており、そして、迂回作戦については、別の形で提案してきている。

8) 弁証法

ネグリは講義の最後を弁証法批判でしめくくっている。「敵対的関係の論理は、単なる地平としてさえも弁証法を拒否する。それはあらゆる二項式[二元論的定式]も否定する。敵対的過程は、ここでは、ヘゲモニーを指向し、その敵対者を破壊し抑圧することを指向する。これは弁証法を、このユダヤ教=キリスト教的思考のこの永遠の定式を、西洋世界で合理性を言い表わすためのこの婉曲法を否定することである。マルクスの中に、われわれは弁証法破壊の最も進んだ企てを読みとり、この方向への大きな前進をみてとることができた。」(342頁)

ネグリが弁証法と考えているものは、対立物を矛盾とみなし、その矛盾が止揚されるという定式だ。資本と労働という敵対的関係にあって、ネグリは、矛盾の止揚を見るのではなく、敵対者の破壊を見、こうして、ここでは弁証法は否定される、と考えた。そして、『要綱』の経済学的範疇を政治的なそれ、と読み込んだネグリにあっては、マルクスによるヘーゲル弁証法の転倒も目には入らなかったのだ。

マルクスは矛盾について、これが止揚されるのは、思考の上でのことだとみていた。現実の経済過程にあっては、矛盾は止揚されずに運動形態をつくりだす。マルクスは経済学的範疇である資本と賃労働という対立物をもつ矛盾がつくり出す経済学的運動形態を叙述した。これを政治学の見地から読むネグリには、例えば、資本制的取得法則が所有と労働の分離をもたらすことや、資本と労働

の交換が二つの異なる過程から成ることなどを見失い、もっぱらそこに、資本からの労働の分離や、必要労働の小流通を見出すことにとどまっている。

そもそも弁証法は、対立物といっても、政治的な意味での敵対関係ではなく、統一された対立物の考察の方法である。資本と賃労働は対立物であるが、しかし、双方は、資本の生産過程において統一されている。これに対して、政治的に見た資本家と労働者の敵対関係は、そもそも弁証法的な関係として措定されているわけではない。『要綱』に「弁証法的諸形態すべてに対するマルクスによる批判」(342頁)を見出すネグリは、経済学的範疇を政治学的範疇と読むことによって、経済学的な運動形態への理解へと進めなかった。ネグリによる弁証法の否定は、このことの帰結ではなからうか。

時間について考える(二)

時間とケア(時間論ノート)

1) はじめに

ケアが時間をあげることであり、人々は他者とのケアの関係の中で個人足りうる、とすれば、ケアの時代の主体像を形成していく際に、時間について解明することが問われる。

2) 時間論の系譜

① アリストテレス

時間論について、最初にまとまった見解を述べたのは、アリストテレスであった。『自然学』第10章—14章が時間についての考察にあてられている。アリストテレスは、まず、当時の時間に対する色々な考え方を紹介し、これを批判的に検討することから論を起している。

「まず、(A) 第一には、時が果たして存在するものどもの部に属するか、あるいは「存在しないものどもの部に属するか、ということ、そしてそのつぎに、(B) その主体はなにかを、問題として提起するのが適宜な見方であろう。」(『アリストテレス全集』第3巻、164頁)

ここでアリストテレスが「存在していないものども」と述べているのは、単なる観念上のものことだから、この考察から、時間は、客観的な存在か、それとも主観的なものか、という意見の対立があったことになる。この対立を考察するに当り、アリストテレスは、次のような時間意義の検討からはじめている。

「時間の或る部分はあったが、今はもうあらぬ、だが次の部分は、まさにあろうとしているが、なおいまだあらぬ。しかも時間は、無限な時間にしても、任意に切りとられたそのときどきの時間にしても、これら[過去の部分と未来の部分]から合成されている。」(164—5頁)

このような時間の存在のありようから、アリストテレスは、第一に過去と未来という存在しないものから合成されたものが実存在を主張しうるか、第二に、部分に分かれたものは、全体が、ある

いはいくつかの他の部分が存在しなければならないが、時間の場合、過去も未来も存在しないから、「今」は部分として成立し得るのか、第三に、「今」は過去と未来を区切るように見えるが、この「今」はずっと同じものか、常に他のものであるのか、という三点から、時間という存在の捉えにくさを明らかにしている。

次に時間の本性とは何か、ということについて、「全宇宙の運動である」とする意見と「天球そのものが時間である」という意見を取りあげ、そして、三番目に最も一般的な考えとして「時間は運動であり、一種の転化である」という意見をあげて、この三番目の考えの検討に力点をおいている。

アリストテレス自身の考えは、時間とは「運動の数である」というものだが、これは一寸わかりにくいので、運動について述べられているところをいくつか引用してみよう。

「ところで、運動するものは或るものから或るものへ運動するのであり、としておよそ大きさはすべて連続的であるからして、大きさに運動は対応する。というのは、大きさが連続的であることのゆえに、運動もまた連続的なのであり、そして運動がそうであることのゆえに、時間もそうなのだからである。というのは、運動がどれだけあったとき、これに応じて時間もまた常にそれだけ経過したと思われるからである。」(169頁)

アリストテレスは、時間は運動そのものではないが、「運動のなにか」であると考え、この「運動のなにか」について、以上のような考察を行っている。ここで述べられている「運動がどれだけあったとき」ということが「運動のなにか」であり、「運動の数」のことだろうが、もう一つ釈然としない。別のところでは次のように述べているところがある。

「ものは時間によって作用される、あたかもわれわれも言い習わしているように、時はすべてを消し去り、すべては時によって老い、時を経て忘却される。しかし、時を経て学び覚えたとか、年若くなったとか、美しくなったとか言いはしない、というのは、時間は、それ自体、むしろ消滅の原因だからである。けだし、時間は運動の数であり、運動はしかるに、存在するものを外に脱離させるものだからである。」(178頁)

ここでは人間の生長が運動と捉えられ、時間は消滅の原因と捉えられている。われわれは運動というと、ニュートンの質料をもたない点の運動をイメージし、運動の可逆性を前提としてしまうが、アリストテレスの運動観は、少なくとも、そのようなものではないようだ。

「だが、時間はどの種類の運動の数なのか、という疑問を出す人もあろう。【これに対して】どのような種類の運動でもかまわないと答えるべきではなかろうか。というのは、時間のうちで、物質は生成し、消滅し、増大し、変化し、移動するからである。だから、これら各々がただ運動であるかぎり、そのかぎりにおいて、時間は【これら各種の】運動の数なのである。それゆえ、時間は、この端的な意味での【すなわち】連続的な運動の数なのであって、或るあれこれの【特殊的な】運動の数ではない。」(186-7頁)

このように、アリストテレスの運動論は、力学で問題になる運動のような抽象的なものではなく、具体的な運動体の生成、増大、消失のことであることがわかる。とまれ、時間を運動そのものと捉えたり、その捉えどころのなさから、存在しないもののように考えてしまうことに対して、時間が「運動のなにか」であり、「運動の数」であると捉えることで、その本質的内容を明らかにしたのだった。

②ニュートンとカント

ニュートンは、物質の運動を抽象し、その法則を力学へと体系化した。その際、空間と時間は何のものにも影響されず、無限の過去から無限の未来まで変化せず、存在するものとした。そして、空間は無限であり、時間は空間のどこでも同じ速さが流れるもので、これらを「絶対空間」と「絶対時間」と名づけた。

「絶対的な、真の、数学的な時間は、それ自身で、そのものの本性から、外界のなにもものとも関係がなく、均一に流れ、別名を持続ともいいます。……絶対的な空間は、その本性として、どのような外的事物とも関係なく、常に同じ形状を保ち、不動不変のままのものです。」(『世界の名著』26巻、ニュートン、65頁)

これは空間の時間の観念を、対象そのものの属性として捉える試みだった。これに対して、カントはコペルニクス的転換を行い、人間の経験的認識を対象によって規定されたものとしてではなく、人間の表象の仕方によって対象が現象として現れてくると見、認識されたものが、認識の枠組みによって、つまり主観の作用に従属していると主張した。

カントは、空間と時間とについて、この転換した見地から考察するに当り、次のように問題を提起した。

「それならば空間と時間とはどのようなものであるか。それは現実に存在するものであるのか。時間および空間は、物の単なる現象にすぎないのか、或は物と物との関係なのか。しかしそれにしても空間および時間は、物自体に——物自体は直観されないにしても、——属しでもするのか。それとも空間および時間は、直観の形式にのみいわば附着しているようなものであるのか、従ってまた我々の心の主観的性質——換言すれば、それがなければ時間や空間という述語は、いかなる物にも付け加えられないところの主観的性質に附着しているようなものであるのか。」(『純粋理性批判』上巻、岩波文庫、89-90頁)

カントは、空間と時間とが、現実に存在するものであるのか、物の単なる規定なのか、物と物との関係なのか、物自体に属するものか、といった間には否定的に解答し、それを人間の直観の形式に附着しているものとみなした。まず空間について、次のように述べている。

「空間表象は、外的現象の様々な関係から、経験によって得られたものではあり得ない、むしろかかる外的現象そのものが、空間表象によってのみ初めて可能になるのである。

空間はア・プリオリな必然的表象であって、この表象は一切の外的直観の根底に存する。……空間は、現象に依在する現象ではなくて、現象そのものを可能ならしめる条件であり、外的現象の根底に必然的に存するア・プリオリな表象なのである。

空間は物一般の関係に関する論証的概念、或はよく言われるような一般的概念ではなくて、純粋直観である。」(90-1頁)

次に時間についても、全く同じようにつかわれている。

「時間は(一)、なんらかの経験から抽象された経験的概念ではない。時間表象がア・プリオリに根底に存しないならば、同時的な存在もまた継続的な存在も、知覚されることすら不可能であろう。我々はかかる時間表象を前提にしてのみ、いくつかの物が同一時に存在したり、或は異なる時に存在することを表象し得るのである。

(二) 時間は一切の直観の根底に存する必然的表象である。

(三) 時間関係を表象する必然的原則や、時間一般に関する公理が可能であることは、かかるア・プリオリな必然性に基づくのである。時間は、一次元のみをもつ、従って多くの異なる時間は、同時的ではなくて継続的である。これらの原則は経験から導来された

ものではない。経験は厳密な普遍性をも、また必然的な確実性をも与えないからである。……

(四) 時間は論証的概念でもなければ、或はまた一般的概念と呼ばれているようなものでもなくて、感性的直観の純粹形式である。多くの異なる時間は、唯一の時間のそれぞれの部分にほかならない。……

(五) 時間が無限にあるというのは、或る一定の長さをもつ時間は、いずれもその根底に存する唯一の時間を制限することによってのみ可能である、という意味にほかならない。それだからこの根源的な時間表象は、もともと無限定なものとして考えられていなければならない。」(97-8頁)

③ヘーゲル

ヘーゲルは、カントの物自体は認識できない、という主張を退け、対象は自我の意識との関係において、その本質を概念として展開するものとみなした。この見地からすれば、空間と時間は、カントが、考えたような、単なるア・プリオリな直観的表象ではなく、それ自体が、対象の概念として、対象の本質を開示するものだった。だから、ヘーゲルによれば、空間は時間に移行し、また時間は空間を生み出す、というように対象は関係しあっており、しかも、一定の場所にある物質の運動が空間から時間へ、時間から空間への移行としてあることを考察し、「物質は、これに対して静止的な同一性としての空間と時間の関係である」(『自然哲学』上、岩波書店版、70頁)と述べている。これは全くすばらしい考えで、このヘーゲルの問題提起については、改めて論じる価値がある。ここでは、カントの説と対比した形での、ヘーゲルの空間、時間論を紹介するにとどめておこう。

ヘーゲルは『エンチクロペディー』の自然哲学で、空間について次のように述べている。

「自然の最初の、あるいは直接的な規定は、自然のばらばらな状態の抽象的な普遍性、……すなわち、この中心が自分の外にある状態(自己外存在)の無媒介な無関係性、空間である。空間は中心が自分の外にある状態(自己外存在)であるから、全く観念的な相互併存状態であり、空間はまた、このばらばら状態がまだ全く抽象的で、一定の区別を自分自身のうちにもっていないから、端的に連続的である。」(47頁)

ヘーゲルは空間を「中心が自分の外にある状態」と規定し、ここから、点や線や面についての考察を行っている。そして、空間から時間への移行について、次のように述べている。

「否定性が、単独に存在する。すなわち、否定性は、(1)点として空間に関係する。否定性は、その現実性を(2)空間のうちで線や面として展開する。この否定性が、中心が自分の外にある状態(自己外存在)の圏域[すべてのものが自己の外に自己の存在中心を置いている集合体]においても単独で存在する。[それが時間である。]しかし同時に単独に、この規定を中心が自分の外にある状態(自己外存在)の圏域に措定しながら、しかも、その際、静かに相互に併存するものにたいして無関係なものとして現象する。このように単独で考察されたとき、その否定性が時間である。」(55頁)

「時間は、中心が自分の外にある状態(自己外存在)の否定的総一である。[空間と]同じように、時間もまた一つの全く抽象的なもの、観念的なものである。時間は存在しながら存在せず、存在し

ないことによって存在する存在である。時間は、直観された生成である。つまり、まったく瞬間的な、すなわち、ただちに自分を克服(止揚)する区別が、それにもかかわらず同時に、外的な、すなわち自分自身にとって外的な区別として規定されている。」(56頁)

④アインシュタイン

アインシュタインの相対性理論について解説するだけの専門的知識はもち合わせてはいない。ここでは、実践的時間論という見地から、ミクロの世界や、宇宙論の世界での実験と計算式から導かれる時空論には言及せず、アインシュタイン自身の言葉によって、ニュートンの時空論の限界を示しておこう。アインシュタインは、「物理学と実在」(『世界の名著』66巻)の「まとめ」の部分で次のように述べている。

「私がまずはっきりさせようとしたことは、物体、空間、主観的ならびに客観的時間といった概念が、相互間でまた経験の本性とどのように結びつけているかということです。古典力学では空間の概念と時間の概念とは独立なものになっています。この理論の基礎をつくるさいに、物体の概念は質点の概念にとって代わられます。そのことは同時に、力学というものが根底では原子論的なものになっていることを意味しています。力学をすべての物理学の基礎にしようとする試みにたいして、光と電磁気は超えがたい困難を生み出します。このようにして電磁気の場の理論へと導かれ、さらに後になると[ただし、古典力学との一種の妥協が試みられたあげくに]、場の概念を基礎にしてその上に全物理学を築こうとする試みが生じます。この試みが相対性理論へと導くものなであります。[それは空間および時間概念の、計量的構造をもった連続体への昇華の過程であります]。 (251頁)

アインシュタインは、絶対空間、絶対時間、高速無限大という仮定のもとに成立している古典力学の枠組みを、光速不変の原理にもとづいて、まず同時性の不成立を証明し、絶対時間が存在しないことを証明している。(『相対性理論』岩波文庫、19頁)。次に電磁気学の成果をふまえ、場の理論から「大きさがEのエネルギーは、 $m=E/C^2$ という質量をもつ」という関係式にもとづいて、空間の概念を革新した。

「一般相対性理論によれば、空間の幾何学的特性は独立したものではなく、物質によって制約されている。それゆえ、物質の状態をわかっているものとして考察の基礎に置いてはじめて、世界の幾何学的構造についてのいくらかの結論がだせるのである。」(『特殊および一般「相対性理論」について』白楊社 144頁)

「私は、時間や空間が、かならずしも物理的実在である現実の対象と離れて、別の存在をそれに帰すことができるものではないことを示したいと思った。物理的対象は空間の内にあるのではなく、空間的に拡がっているのである。こうして〈空虚な空間〉という概念はその意味を失うのである。」(同書、203頁)

時間は絶対的な時間として流れており、空間は、物質を除いても、ハコのような容れものとして、絶対的に存在している、というニュートン力学の前提は、このように、アインシュタインによって、時間と空間は切り離せないものとして、物質自体の空間性、時間性にもとづいて成立しているものであることが示されたのだった。

現場から

政治・文化講座(第5次)第3回レジュメ

テーマ ケアと時間

2004年9月11日

1) 広井良典さんの時間論

『ケア学』(医学書院)より(4頁コピー参照)

- * ケアする側とケアされる側とが、互いにケアしながらより深いものにふれる。
- * カレンダー的時間のもっと奥に「深層の時間」とでも言うべきものが存在している。

『ケアを問いなおす』(ちくま新書)より(第6章<深層の時間>とケア参照)

- * 直線としての人生のイメージと、円環としての人生のイメージ。
- * 日常の時間と深層の時間、あるいは現象としての時間と潜在する時間。
- * 日常の時間は実体として存在するものではなく、人間が作り出した、一つのフィクション、仮想的な存在に過ぎない。直線の時間というメガネをかけて世界を見ている。(204頁)
- * 深層の時間。日常の直線的な時間の底には回帰する円としての時間があり、さらにその根底には、「ポテンシャルとしてはひとつ」の、もっと深層の時間が存在する。このもっと深い層は、「生命そのもの」と言ってもよいような次元である。(206頁)
- * 深層の時間への通路としてのケア。私たちが、自分の「自我」の世界にとどまる限り、時間は限りなく「直線」としてのみ存在し続け、死はその先の端的な「無」、墜落としてしか存在しない。深いケアの関係こそは、そうした自分を「自我」の殻からいったん解き放ち、生がそこから生まれ出た場所である「深層の時間」へと私たちを導く、たしかな通路として働くことが出来る。ターミナルケアの本質は、そのような「たましいの帰っていく場所」を探し出し、ともに確かめるという営みにこそあるように思えるのである。(209頁)
- * 深層の時間とは何か。生者の時間と死者の時間とがクロスする場所。

(広井説のまとめ)

- * 広井説は、生命そのものである「深層の時間」は円環する時間であり、これに対して直線に進む時間とは日常の時間であるが、これは直線の時間と言うメガネをかけることで見える仮想的存在だ、とまとめられる。
- * 時間そのものと、人間の日常的時間意識を分けているのが特徴。
- * この広井説を検証すべく、時間論の系譜をたどろう。

2) 時間論の系譜 (別添資料 A「時間とケア」本号所収及、参照。B「エンデの時間論」未収録、単行本に収録)

- * アリストテレス 時間は運動の数である。客観的時間の規定。(A参照)
- * アウグスチヌス 時間とは精神に刻印された印象。主観的時間論。(B3~4頁参照)

* ニュートン 絶対時間と絶対空間を定義し、これを原理として力学の体系を述べた。客観的時間論。(A2~3頁)

* カント ニュートンの規定をひっくり返し、時間と空間を人間の認識の枠組みと考えた。主観的時間論。(A3~4頁)

* アインシュタイン 時間と空間とは切り離せないもので、またそれらは物理的実在と離れてあるものではない。物質自体に空間性と時間性を認めた。客観的時間論と主観的時間論との間に橋を架けた。(A5~6頁)

* ハイデッガー アインシュタインにヒントを得て、現存在(人間)が時間であると考えた。(B5~6頁)

* エンデ 「時間とはいのちなんです」時間そのものは「一種の音楽」で、光をはじめとして、全てのものに備わっている。(B7~9頁)

3) 時間をどう考えるか

* ニュートンとカントの考えは客観的時間論と主観的時間論として対極に位置しているが、このように対立させられた原理はどちらもその真理性について、同等に主張しうる。

* 運動の数と、何かの精神への刻印、というアリストテレスとアウグスチヌスとの対立は客観的時間と主観的時間とを結び付けて考えるきっかけを与えている。

* アインシュタインの理論は、マイクロ(微小な分子の世界)やマクロ(巨大な宇宙の世界)で妥当しているが、われわれの生活世界では、ニュートンの原理が妥当している。

* とすれば時間論はファンタジーとしてしか成立しないのか。エンデは光をはじめとする万物が放つ振動を「一種の音楽」とし、これといのちが持つ鼓動との共振を時間そのものと考えた。

(広井説について)

* 広井説もファンタジーの世界として展開されている。エンデのファンタジーと対比してみよう。

* エンデの説は、物質の時間と生命の時間とが相互に作用し合うものとして展開されている。広井説では、人間の生命の時間しか考慮されていない。ファンタジーの広がりと言う点でエンデに軍配を上げたい。

4) ケアと時間

* 広井さんが、ケアとは時間をあげること(時間を共有しあうこと)、と規定したことはすばらしい。ただ、ハイデッガーの時間論が、忙しい人間と余裕のある人間との区別を、本来の実存を獲得しているか否か、というように個人の問題にしているのと同じように、ケアの問題を人間の心構えの問題にしてしまうことへの批判意識が希薄なように思われる。

* 物質の時間からいのちの時間が生み出され、それぞれが異なるリズムを刻みつつお互いに共振しあっている、と考えると、工業化社会における工業の時間がいのちの時間を支配していくという、エンデが灰色の男(時間泥棒)の比喻で明らかにした、現代社会の根本的な問題点に突き当たる。

* ケアが時間をあげることだとしたら、ケア産業に資本が参入するということは、資本が利潤追求を目指し、ケアの時間を切りつめていくという傾向を持つ限り、ケアの原理とは二律背反に

なる、ということを知ることが今回の講座開始前の問題意識だった。ここから更に進んでみよう。

*日本でケア産業が成長していくことは避けられない。この分野に参入した資本が撤退し、この分野を協同組合やNPOをはじめとする非営利事業体が担うとき、それがうまく事業展開していくためには、まちづくり地域作りが不可欠になり、この領域ではいのちの時間(生活の時間)が支配的になっていく。そして、ここで実現された「スローワーク」が、工業部門へも波及していくことで、この社会の持続可能な社会への転換を創り出していく、このようなイメージを描いてもいいのではなかろうか。

後記

今回は突然ネグリ研究に手を付けたため、それを掲載します。表さんから現代思想について総括的な研究集会をやる、という提案があり、その最初の成果です。一人ではとてもネグリを読む気はしませんでした。機会が与えられたことでこんなものができました。後アルチュセールが次のテーマです。表さんはスピノザに取り組んでいます。

時間論はPC講座で「時間とケア」というテーマを掲げたことと、モモの増補があって、いろんな時間論に取り組んでみました。結論はレジュメにも書きましたが、時間論はファンタジーとしてしか成立しえないということでした。エンデの時間論がすばらしいのは当然の帰結でした。

以前に書き上げHPにも掲載している「外の主体の弁証法」が2回に分けて、田畑稔さん編集の『唯物論研究』に載ります。発売中の89号に(上)が出ました。

後ニュースタートやサポートセンターの活動でも報告すべきことがあるのですが、今回は掲載を見送ります。

PC講座で今年はまちづくりのケーススタディを取り上げていますが、11月以降も継続してほしいという要請があり、新たに市民文化講座を発足させてまちづくりの研究会を継続させます。PC講座の方は、今期は後3回ありますが、これは市民文化講座に相乗りとし、2005年度の企画から分離させていきます。次年度の企画はまだ白紙ですがやりたいことはいっぱいあります。

この間モモの増補に時間をとられていますが、まもなくイタリアの社会協同組合B型の研究を始めます。イタリアには社会的なハンディをもつ人々を支援する協同組合が7000あり、これらは社会協同組合と呼ばれています。このうち健常者がハンディを持つ人々を支援する組織がA型と呼ばれ、5000あり、そしてハンディを持つ人々自身が働く組織が2000あって、こちらがB型と呼ばれているのです。このお話は本誌12巻2号に掲載してある協同組合運動研究会での意見交換の際に、講師にお招きした市民セクター政策機構の柏井宏之さんから伺ったもので、この話を聞いて私はサポートセンターの活動は、まさにB型にあたると思い当たったのでした。そして何となく既成の二団体とは別に全国的なセンターの建設を展望したのですが、これには根拠があることがわかりました。今後の活動方向が明確になってきました。

(資料) 市民文化講座のご案内

2004年10月 NPO法人ワーカーズ・コレクティブ・サポートセンター

(市民文化講座の開講について)

高槻市におきましても、市民と協働でまちづくりを進めるべく、まちづくり条例の策定がなされようとしています。行政からは市民に対して協働の働きかけがあるのですが、市民の側に準備ができていのでしょうか。まちづくりの協働ということについては個人としての市民では応えようがなく、団体や、NPOなどの事業体の出番です。ところがこのような団体においても、まちづくりの一方の主体となって、行政と協働していく用意ができてはいないようです。

そこでまちづくりの意思を持った人々が自主的に研究活動を進めることができるように、まちづくりの研究会を中心にすすめた市民文化講座を開講することになりました。

主催するNPO法人ワーカーズ・コレクティブ・サポートセンターは、「社会不適応や加齢などから社会参加が困難な人たちの就労支援及び諸能力開発のための社会教育事業を行う」ことを目的に、2003年11月に大阪府より認証されたNPO法人です。高槻市富田に事務所を置いています。そして、この地域を重点地区として活動しているひきこもりの若者の社会参加をサポートするNPO法人ニュースタート事務局関西と一緒に活動しています。企業に就職することに困難を覚えている人たちに就労支援するには、コミュニティビジネスの開発や、NPOの事業の拡大が不可欠であり、このような見地からまちづくりに積極的に取り組んでいます。

(講座の概要)

当面奇数月の第4土曜日午後2時から6時までとし、第3回目を11月に実施します。
2部にわけ、第1部は当法人からの報告、第2部はケーススタディで講師を招くこととします。
2005年度には助成を受けてシンポジウムや遠方からの講師を招く予定です。
参加費 1000円程度ですが、相談に応じます。
場所 当法人の事務所として使わせてもらっている岡本しろろ事務所で行います。

(連絡先)

高槻市富田町1丁目13番25-205号 岡本しろろ事務所
NPO法人ワーカーズ・コレクティブ・サポートセンター 榎
TEL 072-694-3933 携帯 080-3139-7820(境)

(11月の講座の実施要綱)

別紙参照

第3回市民文化講座実施要綱

NPO法人ワーカーズ・コレクティブ・サポートセンター

これまでまちづくりのケーススタディとして、先進事例とされている宝塚市を取り上げ、2回の研究会を持ちました。7月に行われた第1回目では、明石市の市民まちづくり研究所の松本誠さんをお招きし「住民主体の地域自治」というテーマでまちづくりが課題になってきている現状について、広い視点からお話していただきました。

第2回目には宝塚市の中山台コミュニティ作りにかかわってきた住民側の方をお招きし、坂野はるみさんに来ていただいた、この20年間の取り組みの経過について、お話していただきました。講座は盛り上がり、時間が足りないほどでした。

そして今回は、コミュニティ作りには行政の側からかかわられた田中義岳さんをお招きし、行政としてどのように住民主体の形成に努力してきたか、といったことを中心にお話していただきます。

日時 2004年11月27日(土) 午後2時から午後6時まで(第2部は午後4時から)

場所 岡本しろう事務所

連絡 担当者 境 毅 080-3139-7820

参加費 一般 1000円(地域通貨での支払いも可)

(参加費については相談に応じます)

カリキュラム

第1部 イタリアの社会協同組合B型視察報告(午後2時より)

報告者 境 毅さん(当法人理事長)

イタリアは協同組合運動の盛んな国です。「社会的弱者」をサポートする協同組合は、社会協同組合と呼ばれていますが、健康者がサポートする組合はA型で、当事者が働くことを支える協同組合はB型と呼ばれます。11月上旬に、B型協同組合の視察旅行に出かける境さんに、その報告をしていただきます。

第2部 事例研究 住民主体の地域自治 宝塚市のケース(午後4時より)

報告者 田中義岳さん(宝塚市社会教育部長、前コミュニティ部長)

コメンテーター 岡本しろうさん(高槻市議)

宝塚市の中山台は造成された住宅地で、商店街などがある富田とはずいぶん違った町でした。いろんな条件がかみ合ってコミュニティ作りが結実していった経過については前回聞くことができました。今回は行政の側から、住民との協働がどのようにして実現されていったかについて、お話していただきます。